

卒業論文の要旨

論文題目	カラヴァッジョの宗教観について 〈キリストの埋葬〉から探る宗教観
氏名	田中秋実
メジャー	心理学
(要旨)	
<p>本論ではバロック期を代表する画家であるミケランジェロ・メリジ・ダ・カラヴァッジョが、信仰心を持っているかどうかについて論じた。</p> <p>カラヴァッジョは、喧嘩っ早く、殺人を犯した人物として有名であり、これまで粗野で教養がなく乱暴な人物と評価されてきた。一方で、見る者を圧倒させるドラマチックで写実的な画風を確立し、同時代から高く評価されてきた。しかし神や聖人を優美に描くのが主流であった時代に、それらの人物を写実的に描いたため、教会から絵画の受け取り拒否をされ、無信心だと批判されることもしばしばあった。本論ではカラヴァッジョの信仰心の有無を、彼の生涯と〈キリストの埋葬〉というカラヴァッジョの絵画作品をもとに検討した。</p> <p>第一章では彼の生涯と時代背景を考察した。カラヴァッジョは庶民の子として産まれたが、通常貴族が所属するマルタ騎士団に入団し、生涯にわたり枢機卿などのキリスト教のエリート層のパトロンと交流を持った。またキリスト教カトリックの総本山のローマで活動し、カトリック教育の盛んな都市で育った。当時盛んだった対抗宗教改革の意図をくみ取った絵画も多い。そのためキリスト教の教養があったと考えるのが自然だろう。一方で、裏社会の住人であったことも考慮し、当時の庶民の信仰観も考察した。</p> <p>第二章では〈キリストの埋葬〉をもとに3つの理由から信仰心があったと結論付けた。</p> <p>一つ目は、「全質変化」や「隅の石」というキリスト教の教義を理解し表現しているため、カラヴァッジョは確実にキリスト教の教養があるという点だ。</p> <p>二つ目は、聖母マリアの「威厳に満ちた母」の表情についてだ。わが子を失ったにもかかわらず落ち着いた表情は、人間としてのわが子を失った表情というよりは、神の子の母であるということを知覚し、イエスが人類の罪を贖うために死んだということを知っている表情であろう。このような解釈で描いているのはカラヴァッジョがキリスト教に関心があったといえるのではないか。</p> <p>三つめは、イエスやマタイが肉体労働者の姿をしている点だ。カラヴァッジョは神や聖人を優美に描くのが主流であった時代に、あえて写実的に描いた。それは日常の出来事の中に神聖なものを見出そうとする姿勢だと考えられる。この表現は彼にキリスト教の教養があり、さらに関心があるとともに、実際に祈りを体験しているからできたのではないか。</p> <p>キリスト教の教養があり関心を持っていた点や庶民の信仰を鑑みると、カラヴァッジョは当時の人々と同じように、キリスト教を信仰していたといえるだろう。〈キリストの埋葬〉の何重にも重なった表現の工夫は彼自身の信仰するときの感じ方をもとに、編み出されたと考えられる。</p> <p>以上の理由から、カラヴァッジョに信仰心があったと結論付けた。</p>	

(指導教員の推薦のコメント)

自分自身で問いを立て、早くから資料を集め、研究し、そして、自分の納得するような答えを提出している点で、努力が実ったとても素晴らしい卒論となっている。著者の考察力も深く、さらに発展の可能性をもった論文である。卒業後も引き続き関心をもって、独自に研究を続けてもらいたい。